

ファンタジーは  
知らないけれど、  
**何やら規格外**  
みたいです

Fantasy ha shiranai keredo,  
naniyara kikakugai  
mitaidesu

神から貰ったお詫びギフトは、

無限に進化するチートスキルでした】

5

渡琉兎  
Ryuto Watari

Illustration

たく

# 主な登場人物

**dain**

腕利き冒険者パーティ  
「瞬光」のリーダー。  
面倒見がよく、  
剣の腕も抜群。

**リタ**

「瞬光」に新たに  
加入した魔導師。  
回復魔法と強化魔法が  
大得意。

**フェリ**

商業ギルドにおける、  
トーヤの同僚。  
明るい性格で、  
お客様からの評価も  
高い。



**リリアーナ**

商業ギルドのサブマスター。  
仕事ができて  
気配りも忘れない、  
頼れるお姉さん。

**ミリカ**

誰に対してもフレンドリーな  
「瞬光」のムードメーカー。  
ヴァッシュとは  
犬猿の仲……!?

**ヴァッシュ**

足の速さが自慢の狼獣人。  
「瞬光」では  
斥候役を務める。  
口は悪いが、  
親切で優しい。



**レミ**

アリアナの助手を  
している少女。  
常識人な  
しっかり者。

**アリアナ**

魔導具を愛する  
凄うで研究者。  
王都を飛び出て  
商業ギルドに身を  
寄せている。

**トーヤ**

本作の主人公。  
穏やかな性格で、  
どんな時でも礼儀正しい。  
ファンタジー知識ゼロで  
転生したが、  
その身に宿すスキルは  
規格外!?

**アグリ**

トーヤにできた  
初めての友達。  
普段は元気いっぱいだが  
弱気な一面も。

## ◆◇◆◇◆第一章・トーヤ、魔導具を提案する◆◆◆◆◆

日本で社畜として過ごしていた男性——佐鳥冬夜は子供を助けるため、トラックに轢かれて死んでしまった。

しかし、その死は女神のミスから起きた不幸な事故だつたため、冬夜は女神が管理する異世界——スフィアーズへの転生を約束される。

その際、お詫びとしてスキルを与えると言われ、ファンタジーに関する知識がほとんどない冬夜は、「楽をして何かを成すことになんの意味があるのか」と言い、初級の鑑定系スキルである『鑑定眼』が欲しいと主張した。

スフィアーズでの名前を『トーヤ』とし、彼は冒険者パーティの『瞬光』や、商業ギルドのギルドマスターであるジエンナ、頼れる先輩のフェリやリリアーナに助けられ、商業ギルドで社畜らしく仕事をこなしていく。

また、祖父に似た印象のある、なんでも屋の主人プロンや、フェリの弟であり、同年代でもあるアグリと出会い、どんどんスフィアーズでの生活を充実させていく。

またかつて訪れた王都でも良縁に恵まれ、魔導具師のアリアナとレミが商業ギルドで働くようになり、どんどんと周りが賑やかになつていった。

そんな中、トーヤが最高品質のポーションを調合したことで周りが騒がしくなり、新たに出会つたDランク冒險者のミラ、新人冒險者のギルと騒動に巻き込まれてしまふ。大商会の嫡男が暗躍しギルを誘拐したもの、トーヤは瞬光やジエンナ、アリアナやレミの力も借りて、ギルの救出に成功した。

ギルとは新たな友達として仲を深め、トーヤの日常はより賑やかに、楽しいものに移り変わつていつたのだつた。



トーヤの朝はとても早い。

今日も一人で目を覚ますと、そのまま階段を下りていく。

だがこれは彼の日課であり、本人からすれば特に早いとは感じていなかつた。

「おはようございます、ブロンさん」

トーヤはリビングに下りると、なんでも屋の店主であるブロンに挨拶した。

現在、トーヤはブロンの家に居候するという形で一緒に暮らしている。  
「おはよう、トーヤ」

トーヤと同じくらいに朝が早いブロンは、穏やかな様子で返事をする。

「アリアナさんとレミさんは、まだ寝ているのでしょうか？」

「昨日の夜も帰りが遅かつたからね。ゆっくりさせてあげた方がいいんじゃないかな」

ブロンの家には、トーヤと同じでアリアナとレミもお世話になつてゐる。

どうせなら大勢の方が家も賑やかになるというブロンの言葉がきっかけで、四人で生活を共にしているのだ。

「それもそうですが……後ほど、ジエンナ様に報告しておいた方が良さそうですね」

トーヤやアリアナ、レミが働いている商業ギルドでは、ギルドマスターであるジエンナの方針で、残業は良くないとされている。

当然と言えば当然なのだが、それを当然と思わない組織は多い。

特に前世が日本人で社畜だったトーヤからすれば、商業ギルドの体制は非常にありがたいものであり、今後も続けていってほしいと思つてゐる。

故に、アリアナとレミが残業しているということは、ジエンナに報告しなければならないと判断した。

「そうなれば、アリアナもレミも遅くまで残ることはなくなるだろうね」

ブロンの言葉にトーヤは頷く。

「その通りです」

アリアナとレミは商業ギルド、そこに新設された魔導具開発部に所属している。

魔導具が大好きで、毎日のように魔導具のことを考えている二人だが、それもやり過ぎは良くないトーヤは考える。

トーヤから言つてもおそらくは聞いてくれないので、ジェンナから言つてもらえば万事解決すると判断していた。

そんなことを考えながら、ブロンが用意してくれた朝食に舌鼓したづみを打ち、アリアナヒレミが起きてくれるよりも早くにトーヤは家を出た。

ブロンの家から商業ギルドまでの道のりは、トーヤにとつては既すでに通い慣れた道になつていて。

「今日も早いわね、トーヤ君！」

「トーヤじやねえか！ おはようさん！」

「おはようございます」

道行く人から声を掛けられ、挨拶を返すトーヤ。

こんな日々がこれからも続くのだと、心が穏やかになりながら道を進む。

そうして到着した商業ギルドでは、今日もトーヤより早く出勤している人が一人だけいた。

「おはようございます、ジェンナ様」

商業ギルドの扉とびらを潜り挨拶そうじをすると、掃除そうじをしていたジェンナが顔を上げてくれる。

「おはよう、トーヤ」

「手伝います」

「助かるわ」

ジェンナとのやり取りも、トーヤからすればお決まりになつてきている。

一緒になつて掃除をし、それから軽い雑談をしながら、他の職員の出勤を待つのだ。

手を動かしながら、トーヤはアリアナとレミのことで、ジェンナに声を掛ける。

「ジェンナ様。アリアナさんとレミさん、昨日も遅くまで魔導具開発部にいたようなのです」

「あら、そうなの？ 戸締りをする職員のことも考えてほしいわね」

「ジェンナ様から言つてもらった方が早いと思うので、お願ひしてもよろしいでしょうか？」

「もちろん、構わないわ」

アリアナとレミの知らないところで、二人がジェンナに怒鳴られることが決定した瞬間だつた。

それからしばらくすると、一人、また一人と職員が出勤してくる。

ギリギリまで寝ていたのだろう、アリアナとレミは出勤時間間際になつてようやく姿を現した。

それから朝礼が始まり、本格的に仕事が始まる。

「アリアナとレミはちょっと来てくれるかしら？」

「え？」

すると、朝礼が終わってすぐにジェンナから一人に声が掛かり、アリアナとレミは困惑顔だ。

三人で魔導具開発部に姿を消してしまったが、おそらく懲りと怒られるのだろうと思ったトーヤ

は、その表情を自然と苦笑させていた。

商業ギルドの営業が始まつてから三時間ほどが経つと、隣で仕事をしていたフェリがポツリと呟く。

「今日は極端にお客さん少ないわね？」

「何か事情がある、というわけでもないですよね？」

フェリの呟きを耳にしたトーヤが問い掛けた。

「今日は特に何かイベントごとがあるわけでもないし、普通の平日だったはずなのよね」

確かに、それでしたら今日の客足は極端に少ないですね」

営業が始まつてから三時間ほどが経過し、トーヤが働く鑑定カウンターにやつてきた客は一人だけ。

他のカウンターも似たようなもので、このままでは無意味な時間だけが流れてしまうと、トーヤは内心で悩んでしまう。

すると、それを見透かしたようにフェリが尋ねる。

「……トーヤ君、仕事がしたいとか思つてない？」

「おや？ どうしてお分かりに？」

「やっぱりね。なんだか、トーヤ君の表情が分かるようになつてきただかも」

そう口にしたフェリは苦笑したが、トーヤからすると考えていることが駄々漏れなわけで、少しだけ恥ずかしくなつた。

「それじやあ、アリアナさんとレミさんのところに行つてきたらどうかしら？」

そんなことを考えていると、フェリから予想外の提案をされる。

「ですが、いいのですか？ 仕事を抜けてしまつて」

「この状態だからね。それに、朝礼が終わつてからあの二人、すぐに呼び出されていたでしょう？」

なんだか心配になつちゃつて」

その呼び出される原因を作つたのが自分なのでなんとも言えなかつたトーヤは、思わず苦笑いを

浮かべた。

「もちろん、トーヤ君がゆつくりしたいなら、鑑定カウンターにいてくれても——」

「行ってきます！ 何かあれば声を掛けてください！」

フェリが言い終わる前に立ちあがつたトーヤは、やや引きつった笑みでそう口にした。

「……そ、そう？ それなら良かつた」

「あ……えっと、それでは、失礼いたします」

勢いよく言つてしまつたと自覚したトーヤ。

恥ずかしそうにしながらそそくさと歩き出した。

向かった先は、商業ギルド内で魔導具開発部と命名されている一室だ。

——コンコン。

トーヤが扉をノックすると、中から足音が近づいてくる。

そして、開かれた扉の先に立っていたのは、魔導具開発部の一員であり、アリアナの助手ともいえるレミだつた。

「トーヤさんじゃないですか！ どうしたんですか？」

「おはようございます、レミさん。実は、私にできることがないかを聞きに来たんです」

「できること、ですか？」

どうして今なんだろうと疑問に思つたレミだつたが、トーヤの背後に見えた、ガランとした商業

ギルドの状況を見て推測する。

「あ、もしかして、トーヤさんのところはお客様が少ないから、私たちを手伝いにきてくれたんですね？」

「ええ、まあ……」

他にも様子を見にきたのだが、中々それは切り出せず、トーヤは曖昧に答えた。

しかし、レミは微妙な表情になる。

「お気持ちありがたいのですが……」

「おや？ どうしましたか？」

いつものレミならすぐに中へ入れてくれると思つていたため、どこか迷つている様子に首を傾げるトーヤ。

「……実は、朝礼の後すぐに、ジエンナ様から働きすぎだと釘<sup>くぎ</sup>を刺されてしまいまして、それなのにトーヤさんに手伝つてもらつてまで仕事をするとなると……」

すぐにその原因が自分であることにトーヤは気づく。

「な、なるほど。そういうことでしたか」

やや苦笑いになりながらトーヤはそう口にすると、誤魔化すように言葉を続ける。

「で、ですが、今は業務時間ですし、問題ないのでないですか？」

確かにそうなんんですけど……本当にいいんですか、トーヤさん？」

「もちろんです！ お手伝い、させてください！」

アリアナとレミに残業をしてほしくない一心でジェンナに報告したトーヤだったが、ここまで悩まる」と申し訳なく思えてならない。

罪滅ぼしというわけではないが、トーヤは二人を手伝えるならと力強くそう言い切った。

「……分かりました。それでは、ありがたく。中へどうぞ」

「ありがとうございます。失礼いたします」

レミに促されて中に入ったトーヤは、部屋の奥で何やら作業をしているアリアナを見つけた。

「……だいぶ集中されていますね」

「こうなつたアリアナさんは、どれだけ声を掛けても耳に届かないんですね」

トーヤの呟きに、レミが呆れたように嘆き節を口にした。

しかし、トーヤは微笑んで答える。

「ですが、そこがアリアナさんの良いところでもありますよね」

「……そうなんですよね」

レミも本気で呆れているわけではない。

トーヤに遠慮して呆れたように口にしただけだ。

だが、トーヤがアリアナの良いところを理解してくれていたのが嬉しく、笑顔で同意を示した。

トーヤに遠慮して呆れたように口にしただけだ。

トーヤがアリアナの良いところを理解してくれていたのが嬉しく、笑顔で同意を示した。

レミも本気で呆れているわけではない。

トーヤに遠慮して呆れたように口にしただけだ。

トーヤがアリアナの良いところを理解してくれていたのが嬉しく、笑顔で同意を示した。

「今のところはアリアナさんも集中されていましたし、以前にお話ししていたことでも相談しませんか？」

「以前にというと……もしかして、作ってほしい魔導具についてでしようか？」

以前トーヤはアリアナから、新たに作ってほしい魔導具があれば言つてほしいと言われており、そのアイデアをずっと考えていたのだ。

その話をしたトーヤだったが、魔導具という単語が出た途端、アリアナが勢いよく振り返り声を上げる。

「考えててくれたのかね、トーヤ少年！」

「うわあっ!?」

トーヤとレミは驚きの声を上げてしまった。

「……もう！ アリアナさん！」

「ん？ どうしたんだい、レミちゃん？」

「いきなり大きな声を出さないでくださいよ！」

「そりゃー、魔導具のことになると、どうにも声が大きくなってしまうんだよ！」

まさか魔導具に触りながらでも、魔導具の話をされたらそちらにも顔を向けるとは思わず、トーヤは苦笑いしながら口を開く。

「あの、アリアナさん？ そちらの作業はよろしいのですか？」

「あとは微調整くらいだからね、問題はないさ！ それよりもトーヤ少年の考えた魔導具の方が気になるからね！ さあ、聞かせてくれないか！ さあ、さあ！」

作業の手を止めてしまつたかと気になつたトーヤだったが、アリアナは問題ないと言いつつ、大股おおおおまで近づいてくる。

あまりに近くまで来そうな気配を感じたのか、すぐにレミが間に入つて止めてくれた。

「近すぎますから、アリアナさん！」

「そうかい？ あはははは！ すまないねえ、トーヤ少年！」

「全く！ ……それで、どうしましようか、トーヤさん？」

改めてレミが聞いてくれたので、トーヤは頷きながら答える。

「お二人が問題なれば、魔導具の提案をさせていただければと思います」

「はいきたー！」

「アリアナさん！」

「あは、あはは……」

アリアナのテンションについていけるかどうか、トーヤは少しだけ不安になつてしまつた。しかし気を取り直して口を開く。

「まず提案したいのは、冷蔵庫や冷凍庫になります」

トーヤが彼女たちに作つて欲しいと思っていたのは、身の回りの生活が豊かになるような、そんな魔導具だった。

地球での生活を思い出し、その中であれば便利、あつたら助かる、そう思えた家電を参考に提案したのである。

トーヤとしてはこれらの道具は絶対に必要だと思つての発言だつたのだが、提案を聞いたアリアナとレミは顔を見合わせると、首を傾げた。

その後、なんでもない様子でアリアナが答える。

「それ、もうあるわよ？」

「え？ そうなのですか？」

「はい。一般には普及していませんが、貴族家には普通にあると思います」

トーヤは、便利そうな前世のものの中で、ブロンの家にないものを思い浮かべていた。

しかし、それはあくまでブロンの家にないだけで、他の場所にはあるかもしれないという可能性を認識していなかつた。

つまり、冷蔵庫や冷凍庫も、トーヤが知らないだけでこの世界には既にあるということだ。しかし、その話を聞いて、トーヤは疑問に思ったことをアリアナに尋ねる。

「貴族家にはあるということは、逆に言えば一般に普及させるのは難しいのでしょうか？」

「そもそも、魔導具 자체が高価なものだからね。コンロみたいな普及している魔導具も、当初は高価すぎて貴族家にしか出でなかつたんだもの」

「いざれば冷蔵庫や冷凍庫もそうなるとは思いますが、まだまだ難しいかなと思います」

「そう、なのですね……」

そう口にしたトーヤは、他にも自分の思い描いていたものが、実は既に存在しているのではない

かと思い始める。

それでは提案したところで二人の時間を無駄にするだけで、もつと調査をしてからアイデアを出した方がいいんじゃないかとも考え始めていた。

すると、アリアナがトーヤを見つめる。

「他には、魔導具のアイデアはないかしら？」

「あるはあるんですけど、私が知らないだけで、既にあるものかもしれないのです……」

「あら？ それでも構わないわよ？」

魔導具の研究が大好きなアリアナの時間を奪つてはいけないと考えての発言だったのだが、当の

本人からは構わないと言われてしまう。

「……い、いいのですか？」

「もちろんよ！ トーヤ少年が欲しいということは、他の一般人も欲しつてことだし、それなら開発じやなくて改良に力を注げばいいだけの話でしよう？」

「その通りですよ、トーヤさん！ 冷蔵庫や冷凍庫も、一般に普及した方がいいってことですよね？」

「私はそう思います。お肉などの生ものの保存ができればお料理の幅が広がりますし、それはつまり、家庭の幸せにつながると思っていますので」

新しい魔導具とまではいかなかつたが、トーヤはトーヤなりの意見を口にしていく。

それを聞いたアリアナも納得顔で頷き、満足気な笑みを浮かべる。

「それ、いいわね！ 先日の食事会で食べたトーヤ少年の料理も美味しかつたし、ぜひとも改良したいものだよ！」

「そうですね！ あんなに美味しい料理、王都でも食べたことがなかつたです！」

トーヤは以前、お世話をなつた人たちを集めて食事会を開いたことがある。

食事会の場所がブロンの家だつたこともあり、当然だがアリアナとレミも参加していた。

そんな二人の言葉を聞き、トーヤは思わず嬉しくなつてしまふ。

「……あ、ありがとうございます。ですが、普段から食べているではありませんか」

ブロンの家で暮らしている者同士、口にしている料理は同じだ。

基本的にはプロンが料理を作ってくれているが、時にはトーヤも手伝っている。

なので、トーヤの料理を食事会の時だけしか口にしていない、ということはなかった。

「それはそうなのだが、やはり大勢での食事はまた格別ではないか！」

「確かに！ 私、初めてあれだけ大勢で食事をした気がします！ 魔導具開発局では……まあ、仲間外れにされていたので」

苦笑しながらそう答えたレミを見て、トーヤは一人が魔導具開発局でどれだけ不遇な立場だったのかを思い出し、渋面になってしまふ。

そんなトーヤの表情を見たからか、レミとアリアナは笑みを浮かべる。

「ですが、今はとても幸せです」

「その通りだ！ ラクセーナに連れてきてくれて、本当に感謝しているよ、トーヤ少年！」

その言葉を聞いて安心したトーヤだが、アリアナが思い出したように勢いよく話題を変える。

「そうだ！ 冷蔵庫や冷凍庫もそうだがね、トーヤ少年！ 聞いてみたいことがあつたのだよ！」

「な、なんでしようか！」

トーヤは少し困惑しつつ答えた。

「初対面の時に話していたものがあつただろう！」

「初対面の時ですか？ ……何かありましたでしょうか？」

記憶を遡ったトーヤだったが、何かを口にした記憶に辿り着けず、首を傾げてしまう。

「私の研究室が五階にあると言った時だよ！ 自動で上にいけるものがどうとか、言つていたではないか！」

「……あー！ 確かに言つていましたね！」

「それはどういうものなんだい？ あの発言だ、見たことがあるのだろう！」

見たこともあるし、実際に使つたこともある。なんせエレベーター やエスカレーターを思い浮かべて口にしたのだから。

とはいって、それは前世での経験であり、スフィアイズでの経験ではない。

どのように伝えればいいのか、トーヤはしばし思案してしまふ。

「……二種類あるのですが、一つずつでよろしいでしょうか？」

「もちろんだとも！」

「そ、そんなものが本当にありますか？ それも、二種類も？」

興奮しているアリアナとは違い、レミは驚きの表情を浮かべている。

魔導具開発を生業にしている二人でも、自動で移動する箱や階段は見たことも、想像もできなかつたのかもしれない。

「一つは上下に移動する小さな箱のようなもので、人間が五人くらいは入れるものです」

「人間が五人も入れて、上下に移動するだと!?」

「はい。それ用に上下の道筋は必要となります。それがあれば一気に五階まで移動できて楽だな」と、魔導具開発局にいた時は思つておりました。

「も、もう一つはどのようなものなんですか、トーヤさん！」

エレベーターの説明をしたあとは、レミにも興奮した様子で次の説明を催促された。

「もう一つは上下に移動する階段、と言えばいいでしょうか。段に足を乗せると自動で動き出して、一つ上の階に運んでくれるのです」

「なんですか、その夢のような階段は！」

「だが、それはもう魔導具とは言えないぞ！ それはもう！ それはもう……なんだろうね？」

そこまで口にしたアリアナが首を傾げると、トーヤとレミも同じように首を傾げる。

「……まあ、いったんその話は置いておくか」

「いいんですか!?」

ここでアリアナから横に置いておくと言われ、トーヤとレミは驚きの声を上げた。

「呼び方なんてどうでもいいからね！ それに、それだけの規模のものだ。簡単に作れるものではないし、後回しになるものだから次の魔導具の話をしようじゃないか！」

アリアナから問われたため答えたが、現状ではそれほど大掛かりな魔導具を作るのは困難だとい

うことはトーヤも理解できる。

エレベーターやエスカレーターの開発は先送りにされ、ならばとトーヤは女性に喜ばれそうな家電で勝負に出ることにした。

「それでしたら、女性が髪<sup>かみ</sup>を乾<sup>かわ</sup>かす時に使えそうな魔導具なんかはありますでしょうか？」

「それはどのようなものなんだい、トーヤ少年！」

ここでもアリアナのハイテンションは止まらない。

トーヤは彼女のハイテンションがいつまで続くのかと、内心で気になり始めてしまったが、それよりもここはなんとか挽回<sup>ほんかい</sup>したいと考え、魔導具の説明を始める。

「暖かい空気と冷たい空気を出すことができる、手持ちタイプの魔導具です」

「ほほう！ それは見たことも、聞いたこともない魔導具だね！」

アリアナが嬉しそうに笑いながらそう答えた。

「でも、トーヤさん。暖かい空気はなんとなく分かるんですけど、冷たい空気を出す理由は何なんですか？」

「ふむ、確かにその疑問はあるね。髪を乾かす魔導具だろう？ 冷たい空気が必要なのかい？」

レミの疑問にはアリアナも同意し、トーヤへ質問した。

「暖かい空気で髪を乾かすのは当然ですが、冷たい空気を当てることで、セットした髪が崩れにくく



くなるという効果があるようなのです」

前世で社畜として仕事をしていた頃、何度か寝癖が酷い状態で出勤したことがあつた。

出勤してから適当に髪を濡らして整えようとしたことがあつたが、上手くいかなかつた。

その時に同僚の女性から、懇々とドライヤーの大切さを説かれたことを思い出しながら説明していくトーヤ。

（あの時は、愛想笑いをしながら受け流していましたが、まさかこちらの世界で私自身がドライヤーの重要性を語ることになるとは、思いもしませんでしたね）

それからトーヤは、魔導具の耐久性を高めるためにも、本体が熱くなるだけではダメなのだとアリアナとレミに説明していく。

「魔導具の耐久性を考えれば、冷たい空気を出すことで、本体の冷却効果もあるということか」

「それよりも私は、冷たい空気を使うことでセットした髪が崩れにくくなることに驚きました！」

「まあ、私も他の方から伺った情報なのですが……」

あまりにも一人が感心したように話をしているので、トーヤは自分の手柄ではないからか、少しだけ居心地が悪くなってしまう。

「しかし、我々はこの情報をトーヤ少年と出会わなければ、知ることがなかつただろう！」「そうですよ！ ありがとうございます、トーヤさん！」

しかし、アリアナとレミはトーヤのおかげだと声を上げたので、トーヤは最初こそ困惑したもの、最終的には納得し、笑みを浮かべた。

そして、アリアナとレミは真剣な表情で話を始める。

「となると、火属性と水属性、加えて風属性が必要になるということか」

「水でいいんですか？ 氷の方が良さそうでは？」

「確かにその方が一気に冷えるだろうが、寒すぎないかい？ 頭を冷やすなというのは、子供の頃から何度も言われたことだからね」

自分が入る余地はなかつたが、こうやつて二人で意見を出し合うことで、より良い作品が生まれるのだと思い、トーヤは見守ることにした。

「女性が使うのですから、小型で軽い方がいいですよね？」

「むむ。となれば、魔法式も細かくする必要が出てくるか。トーヤ少年、サイズ感的にはどれくらいなのか聞いてもいいかね？」

そこで突然トーヤに話を振られ、彼は慌てたように答える。

「え？ あ、そうですね……これくらいでしようか？ あと、形はこんな感じで……」

トーヤは身振り手振りでドライヤーのサイズ感や形を伝えると、アリアナは額に手を当てながら何度も頷く。

「ふむ。それくらいで問題なければ、値段も抑えられそうだね」

「……あの。やはり小型化すると高価になつてしまつてしまうでしようか？」

アリアナの発言を受けて、トーヤはちよつとした興味から質問してみた。

「そうだね。素材ごとに刻<sup>きざ</sup>める魔法式の限界<sup>きげい</sup>が存在しているんだ。<sup>膨大</sup>な量を刻もうと思えば、それなりにサイズも大きくなってしまう。頑丈<sup>がんじょう</sup>で魔法に適性のある素材を使えば小型化も可能なのが、そういった素材に限つて、高価なものが多<sup>あ</sup>いのだよ」

「属性に適した素材があつたりもしますから」

アリアナの説明に、レミが補足を付け足してくれた。  
それを聞き、トーヤは過去に仕事の最中などに鑑定した素材の中に、魔法適性の高いものがあつたことを思い出す。

そういつたものが魔導具にも使われているため、物によつては高価になるのかと納得する。  
その間にもアリアナとレミは新しい魔導具についての話し合いを続けていく。

冷藏庫と冷凍庫を提案した時は失敗したかと思つたが、最終的にはドライヤーで二人の魔導具師魂に火を点けられたようで、トーヤは内心でホッとする。

——コンコン。

するとここで、魔導具開発部の扉がノックされた。

「はーい！」

レミが返事をしながら扉を開くと、そこにはフェリが立っていた。

「ごめんね、レミさん」

フェリが謝ってきたので、トーヤは自分の仕事のことかもしれないと思い答える。

「どうかしましたか、フェリ先輩？」

「ちょっと私では鑑定できない品があつてね。トーヤ君、お願いできるかな？」

「かしこまりました」

トーヤがすぐに返事をすると、アリアナとレミへ向き直る。

「というわけなので、今日はこの辺りで失礼いたします」

「本日はありがとうございました、トーヤさん！」

「ああ、トーヤ少年！ この魔導具の名前は決まっているのかい？」

挨拶をしてから魔導具開発部をあとにしようとしたトーヤだが、最後にアリアナからそんな言葉が掛けられた。

「トーヤー、と言います」

「ドライヤーか。……分かつたよ！ 今日はとても楽しかった！ また時間があれば、いつでも訪ねてくれたまえ！」

こうして魔導具開発部を出たトーヤは、鑑定カウンターでいつもの仕事をこなしたのだった。

その後の鑑定カウンターは混み合う時間に突入したこともあり、トーヤは営業終了まで忙しなく働いた。

アリアナとレミがどのように作業をしているのかも気になつたが、本業を疎かにするわけにはいかないと、鑑定に集中する。

そうして無事に営業時間が終了した。最後に書類をまとめたトーヤは、商業ギルドを出る前に魔導具開発部に立ち寄る。

部屋の前に向かうと、扉をノックした。

——コンコン。

「……返事がありませんね？」

扉を開いてもいいかと考えたが、女性しかいない部屋に男性が勝手に入るのもどうかと思い、僅かに思案したあと、そのまま踵を返す。

魔導具開発に集中してノックに気づいていない可能性もあるが、それならば遅くなり過ぎない時間にリリアーナやジエンナが声を掛けるだろうと判断したのだ。

ドライヤーについて何かしら助言ができるべきも考えたが、急ぎではない。

明日でもいいかと思いながら、トーヤはそのまま商業ギルドをあとにした。

「……ドライヤー、完成したらしいですね」

帰り道を歩きながら、トーヤはそんなことを呟いた。

もしも本当に、自分の助言から魔導具が完成したのなら、それはとても喜ばしいことだ。

それが一般にも普及するとなれば、なおのこと嬉しい。

異世界に与える変化は小さなものなのかも知れない。

しかし、自分が影響を与えるのであれば、それくらいがちょうどいいのかかもしれないと感じ、トーヤは自然と微笑んだ。

(私は私なりに、スフィアアイズに貢献<sup>こうけん</sup>するとしましよう。大きな変化でなくてもいいのですから)

スフィアアイズに転生する時、トーヤは自分にスキルを授けてくれた女神から言われたことを思い出す。

『——新たな人生を謳歌<sup>ちゅうか</sup>していただければ、それで構わないのですわ』

トーヤは今日まで、本当に自由に生きてきたなと思い返す。

危ないことがあつたが、それもトーヤが自ら選択したことなのだから、自由に生きた結果なのだと思えば納得できる。

社畜時代を考えれば、自分で考えて行動すること、ほとんどなかつた。

「……私は本当に、スフィアアイズに転生できてよかつたです」

そんなことを考えながら歩いていたからか、トーヤはあつという間にブロンの家に到着した。

「ただいま戻りました」

裏口から中に入り、声を掛ける。  
すると、ブロンが答えてくれた。

「ああ、おかえり。今日はどうだったかな？」

「午前中はお客様も少なくて、魔導具開発部に顔を出していました

そう伝えると、ブロンは興味深そうにトーヤを見つめた。

「何か面白い魔導具でも思いついたのかい？」

なんでも屋を経営しているブロンは、元々便利な道具に興味を持つている。

トーヤが魔導具開発部に顔を出したと聞いて 詳しい話を聞きたくなつたのだ。

「最初は冷蔵庫や冷凍庫を一般に普及できないか、ということを話してきました」

「あれは高い魔導具だからね。まあ、魔導具はどれも高いけれど、その中でも特別だ」  
冷蔵庫や冷凍庫についてはブロンも知つており、その値段を思い出し苦笑する。

しかし、トーヤは答える。

「ですが、冷蔵庫や冷凍庫があれば、お料理の幅が広がると思いませんか？」

「そうだが、なかなか一般への普及は難しいんじゃないかな？」

「そうかもしれません、アリアナさんとレミさんはやつてみると言つてくれました」

「なんど、そうなのかい？」

「はい！ もしそうなれば、私からブロンさんへプレゼントさせてくださいね！」

ブロンにはお世話になりっぱなし。そしてこれまで、トーヤはここだと決めた時以外はほとんどお金を使用していない。

商業ギルドからの給料は貯まる一方で、どうせ使うならお世話になっている人のために使いたいと考えていた。

「いくら一般に普及できるようになつたとしても、高いものは高いはずだ。そんな高価なもの、いただけないよ」

「何を仰りますか！ それならば、私が欲しいから買います！ それならば問題ないでしょう！」

「全く。トーヤは頑固だね」

ブロンなら断るだろうことも想定していたので、トーヤは断られた直後に言い返す。

そんな彼を見たブロンは苦笑しながらも、どこか嬉しそうに笑っている。

「まあ、そういうことならわしがとやかく言う必要はないかな」

「そうでしょうとも」

「その代わり、そくなつたならわしからも何かプレゼントしなければならないね」

「私からの感謝の気持ちですし、私の勝手で買うのですから、必要ありません！」

ブロンの言葉にトーヤが否定の言葉を口にした。

「ならば……わしも勝手に買ってしまえば、問題はないということだね」

「そう言つていたゞらっぽく笑うブロン。

「それは！ ……うーん、そくなつてしましますかあ」

トーヤは腕組みをしながら考え込んでしまう。

こんなことまで真剣に考へているトーヤを見て、ブロンは思わず微笑んだ。

「さて、続きは夕食を食べながらにしようか。せつかくの料理が冷めてしまうからね

「はっ！ 確かにその通りですね！」

ブロンの言葉を受けたトーヤは我に返り、すぐに手を洗つてから席に着く。

テーブルには既に料理が並べられており、ブロンも席に着くと、一人は料理を堪能した。

翌日、トーヤはいつも通りに出勤したのだが、そこでジエンナに声を掛けられた。「トーヤ。あなたは今日、魔導具開発部で仕事をしてちょうだい」出勤して早々のことだったため、何事かと困惑してしまう。

「えっと、鑑定カウンターは？」

「フェリに任せるわ。彼女で鑑定できないものがあれば、明日に回します」「ですが、それなら私が鑑定カウンターに戻ればいいのでは？」

昨日の対応を思い出しトーヤは答えるが、ジエンナは呆れた様子だつた。

「そうなのだけれど……おそらくだけれど、アリアナがあなたを手放さないわ」「……アリアナさん、ですか？」

ここでアリアナの名前が出てくるとは思わず、トーヤはさらに困惑する。

「昨日の営業後、彼女を魔導具開発部から追い出すのが大変だったのよ」「あー……それ、絶対に私のせいですよね？」

「何か話をしたのでしょうか？ その開発を急ぎたいのだと、レミが教えてくれたわ」

そう口にしたジエンナは、小さくため息を吐く。

「ですが、ジエンナ様が怒つてくださった当日ですよね？ まさか、その日にいきなり食い下がるとは……」

「そうなのよね。凄腕の魔導具師なのだろうけど、こだわりがものすごいわね。さすがのわたくしも驚いたわ」

「なんと言いますか、申し訳ございませんでした」

アリアナとレミに残業をしないよう言つてほしいとお願いしたのはトーヤだ。

だがトーヤの助言のせいで、二人は新しい魔導具を早く開発したいと考えてしまつている。これでは本末転倒だと感じ、トーヤはすぐにジエンナへ謝罪した。

「トーヤが謝ることではないわ。あなたが二人を勧誘してくれたおかげで、こちらは大きな利益を得ているのだからね」

「ですが……」

「彼女の気質をしつかりとコントロールするのも、わたくしたち上司の仕事だもの。そして、そのコントロールのために、今日は一日トーヤの力を借りたいってところかしら」

ジエンナはそう口にすると、お茶目にウインクをしながら話してくれる。

「レミからトーヤが話していた魔導具について説明を受けたわ。わたくしも使ってみたいと思えた

し、お願いできないかしら?」

そして、最後には自分も使いたいのだと言ってくれた。

もしかすると、トーヤをやる気にさせるための方便かもしれない。

だとしても、そんなジエンナの期待に応えたいという想いの方がトーヤは強かった。

「もちろんです! それに、私が口にしたことから始まつたことですし、最後まで助言させていた

だきます!」

「助かるわ。ありがとうございます」

その後、トーヤは鑑定カウンターの準備を終わらせると、フェリが出勤したタイミングで事情を説明する。

「――というわけで、今日は一日、魔導具開発部で仕事をすることになりました」

「分かったわ。それにしてもすごいよね、トーヤ君って」

説明を受けたフェリはすぐに快諾すると、そのままトーヤに感心しながら呟いた。

「すごいって、何がでしようか?」

「鑑定、計算、他にも色々と私たちの手伝いをしながら、魔導具開発にも助言ができちゃうだなんて、本当にすごいよ!」

「いや、私がすごいと言っよりは、先達がすごいと言いますか……」

アリアナやレミとのやり取りでも思ったことだが、トーヤの知識は、彼自身が生み出したものではない。

日本だけではなく、地球という世界で開発され、改良され、人間が当たり前のように使っていった文明の力なのだ。

だからだろう、自分が褒められることに罪悪感があり、素直に喜べなかつた。

「だけど、トーヤ君がいなかつたら、アリアナさんたちはどんな魔導具を開発しようか、今も悩んでいたかもしれないんでしよう? それはやっぱり、トーヤ君のすごさだと思うな」

「……フェリ先輩も、アリアナさんやレミさんと同じようなことを仰るのですね」

トーヤは思わず、呟いていた。

「それはそうだよ! だって、本当のことだもの!」

そう口にしたフェリは、満面の笑みを浮かべていた。

どういう理由であれ、トーヤがきっかけを作ったのであれば、それはトーヤの功績なのだとフェリは語る。

それを素直に受け入れる自信が、今のトーヤにはまだなかつたが、それでも彼が抱く申し訳なさは少しだけ和らいだ。

「……そうですね。ありがとうございます、フェリ先輩」

「私は思つたことを伝えただけだよ。それじゃあ、魔導具開発部でのお仕事も頑張つてね！」

「はい！」

フェリからエールをもらい、トーヤは元気よく返事をする。

そして、魔導具開発部へ向かった。

自分にできることは助言と鑑定だと心の中で言い聞かせ、小さく息を吐く。

(なるべく早くドライヤーを形にして、鑑定カウンターへ戻れるようにしなくてはいけませんね)自分がやるべきことを明確にしたトーヤは、魔導具開発部の扉を開いた。

「おおっ！ 待っていたぞ、トーヤ少年！」

扉を開いた途端、アリアナが歓喜の声を上げた。

「お待たせいたしました、アリアナさん。レミさんも、おはようございます」

「おはようございます、トーヤさん。ふあああ……」

元気なアリアナとは違い、レミはどこか眠たそうだ。

アリアナに付き合わされて夜遅くまでドライヤーの話し合いをしていたのだろう。

その様子を見て、トーヤはレミに頭を下げる。

「私のせいで、アリアナさんに付き合わされたのではないですか？ 申し訳ございませんでした」

「ううん、いいんですよ。これが私の仕事でもありますからね」

「ちょっと、レミちゃん！ 私に付き合うことが仕事って、どういうことだい！」

レミの発言を受けたアリアナが抗議するも、トーヤは気にすることなく話を進めていく。

「今日はドライヤーについてお話しするため、ジエンナ様からも許可をいただき、丸一日こちらへお邪魔いたします」

「そうなのかい！ それは嬉しい話だね！」

すると、アリアナは思考はすぐに切り替え、笑顔で答えた。

しかし、レミは心配そうな表情をしている。

「でも、鑑定力ウンターは大丈夫なんですか？」

「そちらはフェリ先輩にお任せいたします。鑑定が無理なものは明日に回してくれるそうです」

トーヤは笑顔で答えると、アリアナは満足げな様子だ。

「ふつふつふー！ 私の魔導具が、ギルドの助けになつてているということだね！ いやー、嬉しい限りだよ！」

アリアナは喜んでいるが、レミは申し訳なさそうな表情のままだ。

とはいえ、これはギルドマスターであるジエンナの決定なので、トーヤがどうこうできることではない。

そのため、トーヤは明るい口調でレミに告げる。

「レミさんが気にすることありませんよ。それに、気にしていただけのでしたら、なるべく早く魔導具を完成させてしまいましょう！」

「……そうですね。ありがとうございます、トーヤさん」

「よし！ そうと決まれば早速、ドライヤー第一号を見てもらおうか！」

「……え？ だ、第一号？」

トーヤの中では、これからドライヤーを作り上げるために相談していく、という流れを予定していた。

しかしアリアナの口からは「ドライヤー第一号」と発せられた。

トーヤには、既にある程度の形ができると聞こえたのだ。

まだ一日しか経っていないのにと思いつつ、トーヤは確かめるように尋ねる。

「……もしかして、既にある程度は出来上がっているのですか？」

「もちろんだとも！ とはいって、安全確認などはまだだがね！」

楽しそうなアリアナとは異なり、トーヤは驚きのあまり何も言えなくなってしまう。

「さあ、トーヤ少年！ 早速見てくれないかね！ さあ、さあ！」

そう口にしたアリアナは、トーヤの後ろに回り、彼の背中を押して奥へと進む。奥のテーブルには布を被せられた何かがある。

これがドライヤーなのだと、容易に想像がついた。

「では、いくぞ？ これが私とレミちゃんが作り出した、ドライヤー第一号なのだよ！」

アリアナが勢いよく布を外すと、そこにはまさしく前世の形にそっくりなドライヤーが置かれていた。

「……なんと……口頭でしかお伝えしていなかつたのに、これはまさしくドライヤーそのものではないですか！」

「そうだろう！ とはいって、見た目はまだ武骨な状態だから、ここからデザインは洗練させなければならないがね！」

「だとしてもすごいですよ……そ、それじゃあ、すぐに鑑定してみますね！」

今回ばかりはトーヤも興奮を隠すことができず、すぐにドライヤーの鑑定を始める。

トーヤが現在所有している鑑定スキル『聖者の瞳』であれば、魔導具の完成度を細かく鑑定することが出来るのだ。

スキルを使用すると、トーヤも驚きの完成度が表示された。

「完成度は……おお！ 九九パーセントと出ましたよ！」

「九九パーセントだつて？ こ、今度こそは完璧だと思っていたのにいいいいつ！！」

トーヤとしてはその高さに思わず驚いてしまうような数字だったのだが、アリアナからすれば悔

しさが爆発する数字だった。

すると、レミがアリアナをフォローする。

「一回目で九九パーセントですよ！ 喜ばしい結果じゃないですか！」

「そうだけども、レミちゃん！ 私は完璧を目指していたのだよおおおつ!?」

頭を搔きむしっているアリアナを横目に、トーヤは何がいけなかつたのか、ドライバーの鑑定結果に目を向けていた。

(うーん……私から見ても、これは完成と言つても問題はなさそうなのですが……おや？)

鑑定結果を見ても機能の問題は見つからない。トーヤはどうしてこれが完璧ではないのか首を傾げていた。

しかし、その原因を見つけると、トーヤは苦笑いしてしまう。

「ど、どうしたのだ、トーヤ少年!!」

そんなトーヤの表情を見ていたのか、アリアナが顔をグイッと寄せながら聞いてきた。

「失礼いたしました、アリアナさん。こちらは完璧に完成と言つていいかと思います」

「ほ、本当かね、トーヤ少年！」

トーヤの言葉に嬉しそうな声を上げたアリアナだったが、そこへレミが疑問を口にする。

「でも、どうして最初は九九パーセントと言つたんですか？」

鑑定結果は間違いなく九九パーセントと表示されていた。

ならば、その原因があるはずなのだが、トーヤは完璧だと口にする。

レミにとつてはそれが気になっていた。

「どうやら、私に原因があつたようなのです」

「トーヤさんに？」

「私のドライバーの知識には、標準の機能以外にも、様々な機能が付いたものがありました。そのせいもあって、九九パーセントと出てしまつていたようなのです」

レミの質問に答えたトーヤだったが、その答えは一人の興味をそそるものになつてしまつた。

「様々な機能だと!?」

「それはいつたいどのようなものなんですか!?」

「あー……ま、まずはこちらのデザインを整えて、完璧に仕上げてはどうでしょうか！」

まさかここまで食いつかれるとは思わず、トーヤは慌てて最初のドライバーを完璧に仕上げようと口にした。

(様々な機能があるのは知つておりますが、それをどのようにして再現するのか、それはさすがに分かりません。答えられないことは、言わないに越したことはありませんからね)

自分の失敗だと理解しつつも、どうにか誤魔化そうとするトーヤ。

「ふむ。確かにその通りだね。魔導具師として、まずは最初の一つを完璧にしなければ！」

「ですが、トーヤさん！ こちらが完成したら、色々と教えてくださいね！」

「……ぜ、善処、いたします」

苦笑いを浮かべながら答えたトーヤは、ドライヤーのデザインをどうするべきかと話し合ったアリアナとレミを見つめていたのだつた。

ドライヤー第一号が予想外にほぼ完璧な仕上がりになつていてからか、トーヤは特にやることがなかつた。

そのため、昼休憩(さうきゅう)はレミと一緒に入ることになつた。

「アリアナさんは本当に一緒にやなくてよかつたのでしようか？」

そう呟いたのはトーヤだ。

魔導具開発部の場合、誰か客がやつてくるということはないので、部屋を完全に空けてしまつても問題はない。

なのでトーヤはアリアナも休憩に誘つたのだが、彼女は聞く耳を持たなかつた。

「アリアナさんの悪い癖が出てしましたね」

苦笑しながらレミはなんでもないように口にした。

だが、トーヤとしては問題になるのではと思っている。

(休憩に入つていないこと)ジエンナ様に知られたら、ものすごく怒られそうですけどね)

そんなことを考えながらカウンター裏に移動するトーヤとレミ。

「よつ！」

するとそこへ、友人であり、共に商業ギルドで働く仲間でもあるアグリが声を掛けってきた。

「お疲れ様です、アグリ君」

「お、お疲れ様です！」

トーヤがいつも通りに挨拶をすると、続けてレミがやや緊張した様子で口を開く。

あまり関わりのないアグリに驚いたのだ。

しかし、アグリはそのことには気づかず、トーヤに話しかける。

「なあなあ、トーヤ！ 今日は魔導具の開発をしてるんだろ？ どんな感じなんだ？」

トーヤとレミは机を挟んで向かい合つて座つていた。

そんなトーヤの横に腰掛けたアグリは、弁当を広げながら聞いた。

「女性の髪を乾かす魔導具を考えています。私やアグリ君には、必要なものかもしれませんね」「そうなのか？ でも、姉ちゃんもぼやいてたかも。髪が早く乾いてくれたら、すぐに寝られるのに一つで」

アリアナやレミ、ジェンナからの意見は聞いていたが、まさかフェリも髪を乾かすことに難儀していたとは知らず、トーヤは驚きの表情を浮かべる。

「女性なら誰もが思うことだと思いますよ」

そこへレミが口を開くと、トーヤとアグリは彼女を見る。

「そうなのか？　あ、いや……ですか？」

しかしレミは笑いながら、普段通りにしてほしいと答えた。

「気にしないでください。私の方が後輩ですし、普段通りで構いませんよ」

「そうか？　へへ、ありがとう！　んでんで、女性はみんなそうなのか？」

するとアグリは笑顔になつて会話を続けた。

順応するのが早いなと感心しつつ、トーヤもレミの答えが気になり耳を傾ける。

「そうだと思います。風邪の予防にもなりますし、濡れたままで寝てしまうと、翌朝起きた時の寝癖がすごかつたり、大変なんです」

「寝癖は分かるかも！　俺も髪が長かつた時は、すげー寝ぐせで母ちゃんに見せたもんな！　まあ、

怒られちまつたけど」

「お、怒られてしまつたんですね」

最後のオチを聞き、トーヤは苦笑いしながら口を開いた。

アグリは不満そうに話を続ける。  
「このまま外に出るつもりかー！　って言われた！　んなわけないのにさー」

「お母さんからすると、アグリさんが周りから笑われないようにしたかったんでしょうね」  
レミの言葉にアグリは答える。

「そこののかなー？　……まあ、今はもう関係ないか！　それよりも魔導具だよ！　それ、できたら教えてくれよ！　姉ちゃんにも使わせてあげたいんだ！」

アグリは気軽にそう言うが、魔導具は高価なものだ。

そのことを思い出し、トーヤはやや没面になりながら口を開く。

「アグリ君。実は魔導具って、とても高価なものなのです」

「あっ！　トーヤ、俺が魔導具を高価だって知らないと思つただろう！」

「……知つているのですか!?」

驚きの声を上げたトーヤに、アグリはやや怒った風を装いながら反論する。

「当然だろうが！　バカにしすぎだからな、トーヤは！」

「も、申し訳ございませんでした」

しゅんとしてしまつたトーヤを横目に見ながら、アグリは小さく息を吐く。

「……はあ。トーヤは本気で受け取りすぎ！」

「……え？」

「これくらいで俺が本当に怒るわけないだろうが！」

快活な笑みを浮かべながらアグリがそう口にすると、トーヤは瞬き<sup>まばた</sup>を繰り返し、最終的には安堵<sup>あんどの</sup>の息を吐く。

「……はああああああ。あ、ありがとうございます、アグリ君」

「俺とお前の仲だらうが！」

そう口にしたアグリは、トーヤの肩に腕を回した。

トーヤも笑顔になり、そんな二人をレミが微笑ましく見守っている。

「お二人はとても仲が良いんですね」

「おう！俺とトーヤは親友だからな！ いいや、大親友だ！」

確かに、アグリ君の仰る通りですね』

レミの言葉にアグリが胸を張りながら答えた。

その言葉を聞き、嬉しそうに頷くトーヤ。

トーヤはアグリのことを親友だと思っていたが、お互に同じ思いだつたと分かり、それが嬉しかつた。

「ですが、アグリさん。話を戻すようであれですけど、魔導具は本当に高価なものですよ？ どうされるおつもりなんですか？」

レミが改めて魔導具の値段について口にすると、アグリは笑いながら答える。

「働いて貯めてるお金は使つてないからな！ まあ、なんとかなるって！」

「な、なんとかつて……」

これがアグリだなど思いながらも、トーヤは彼にはもつと計画的にお金を使ってほしいとも思つてしまつた。

特にアグリはフェリのために魔導具を買いたいと思っているのだから、このような考えなしに魔導具を購入してプレゼントとされても、フェリは喜ばないのでないかと思ったのだ。

そう思い、トーヤはやんわりとした口調でアグリに告げる。

「きちんとお金のことも考えて購入した方が、フェリ先輩も喜ぶのではないといけませんね」

「あー……まあ、姉ちゃんつてお金に厳しいからなー」

「そうだと分かつてているなら、なおのこと計画的にお金を使わないといけませんね」

アグリも納得してくれたようで、完成したら金額を教えてほしいと元気よく口にした。

ここで休憩時間は終わり、トーヤたちは仕事に戻つていく。

トーヤとレミは魔導具開発部へ向かい、アグリは会計作業だ。

しかし、魔導具開発部に一人がたどり着くと、そこでは予想外の出来事が起きていた。

「ちょっと、アリアナ！ あなたはなんで休憩に行つていのいの！」

「いや、その、魔導具がそろそろ完成間近でして、ここで手を止めては——」

そう、ジエンナがアリアナに怒っていたのだ。

ジエンナは語気を荒らげながら、アリアナに詰め寄る。

「これ以上手間を取らせるようであれば、しばらくの間魔導具の開発を止めてもらうわよ！」

「そ、それだけはご勘弁を！ さ、早速休憩に行つてきます！」

慌ててそう口にしたアリアナは、魔導具開発部を飛び出していった。

「全く、あの人は……あら、トーヤにレミじやない。休憩は終わったの？」

頭を抱えながら声を掛けてくれたジエンナに、二人は苦笑しながら頷く。

「終わりました」

「トーヤさんが声を掛けてくれていたんですが、言うことを聞いてくれなくて」

「あの性格ですもの、仕方がないわ。アリアナが休憩に行つたのだから、二人はできることをやつていてちょうどいいね」

そう口にしたジエンナは笑顔に戻り、そのまま魔導具開発部をあとにする。

残されたトーヤとレミは、ドライヤーのデザインを考えながら、アリアナが戻つてくるのを待つことにした。

—— そうして、一時間後。

「いやー！ 参ったねー！」

頭を搔きながら、アリアナが苦笑しつつ戻ってきた。

「アリアナさん。これを機に、きちんと休憩に入つてくださいね？」

「もちろんども、トーヤ少年！ 任せてくれたまえ！」

「休憩を取るのは当たり前ですよ、アリアナさん！ 私は恥ずかしいです！」

顔を覆いながらレミがそう口にすると、アリアナは慌てて彼女へ駆け寄る。

「す、すまないね、レミちゃん！ これからはちゃんと休憩に入るから！ ね？」

アリアナはレミが泣いてしまったのではないかと慌てていたのだが、実はそうではない。

今後も同じようなことが起きないよう、トーヤとレミで一芝居打つてみようと考えたのだ。

（上手くいきましたね、トーヤさん！）

アリアナに見えないよう、レミは横目でトーヤを見ながら、そんなことを考えていた。

「もしもアリアナさんが休憩に入らなかつたら、私からジエンナ様に報告しますからね」